

# 「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫

◆◆◆ No.0698 ◆◆◆

22/08/03

## 【「8月円高有利」は古い経験則、今年はどっちに動く!?】

7月半ばに140円まであと61銭と迫るドル高値139.39円を示現したドル/円。そんな7月相場の月間変動幅は6.88円となった。10円前後の変動を記録した3月、4月そして先月(8.36円)円には及ばなかったが、それでも6.88円となかなかの変動を記録している。さすが「二十年に一度」の大相場といえるかもしれない。

そんな7月相場を受けた、足もとの8月相場は一般的に「円高有利」として知られている。ご承知のとおり、前述高値139.39円を示現したのち、ドル/円は急落しており、今月2日には一時130円台も。さらなるドル/円の下落があるのか、先行きには要注意だろう。

### ◎年間を通して「小動き」多い、サマーバカンスのなか売買は通常なら「手控え」

当レターで月のはじめに取り上げる「経験則から見た月間見通し」。それと関連し、8月相場については一般的にもよく浸透している経験則がある。それは、「8月相場は円高有利」という話だ。確かに、1990年以降昨年までの過去32年間の勝敗表をみると、13勝19敗という状況となっている。

しかし、率に換算すると円高の確率は60%をわずかに欠く程度。極端に偏っているとまでは言えない。実は2012年から昨2021年まで過去10年に限れば、戦績はなんと6勝4敗。ドル高・円安の方が逆に有利という状況だった。

これからすると、「8月は円高有利」との見方は少し古い経験則で、現在ではそれを鵜呑みにし、今年相場に単純に当てはめることは危険であるのかもしれない。過去のデータをよくよく勘案したうえで、なるべく確度の高い見通しそして戦略を立てていただければと思う。

そんな8月相場には、別の特徴がある。具体的には、「あまり大きな値動きをたどることが多くはない」ということだ。たとえば、2020年の8月は月間変動幅1.95円で年間11位、昨2021年は同2.08円で年間10位一の変動にとどまっていた。

一般的に8月は中旬にかけ日本が盆休みを迎えるほか、欧米勢もサマーバカンスを取る向きが多い。つまり参加者が減退し薄商いをたどることが多い環境下、「薄商い＝荒れ模様」の展開をたどるのではなく、「薄商い＝動かない」ということになる公算が高いと言えそう。今年の動静は果たして如何に!?

一方、相場そのものの特徴というわけではないが、過去8月のニュースや世界情勢を調べてみたところ、為替や金融に関する重要な事象が起こることが少なくないことがわかった。

一例を挙げると、「ニクソンショック(1971年)」「EMSの通貨調整(1993年)」「ドル/円が100.40円の当時最安値を記録(1993年)」「ドル/円が147.64円のドル戻り高値示現(1998年)」「ルーブル危機(1998年)」「1995年記録のドル最安値79.75円を初めて下回る(2011年)」一などとなる。

もちろん、こうした事象は毎年確実に起こるものではない。しかし、昨年から今年にかけての社会情勢はもはや何が起ってもまったく不思議はないだろう。

ちなみに、個人的に気になっている要因のひとつが「中国不動産リスク」の顕在化と「韓国金融市場」について。前者については、のりくらりと延命措置をとってきたようにも見える恒大集団をはじめとする不動産リスクがついに末期状態。いよいよ待ったなしの状態を迎えつつある気がしないでもない。また、このところは少し落ち着いているが、ドル/ウォンが「分水嶺」と言われる1300ウォン以上のレベルで推移し、韓国通貨当局からの通貨防衛介入の動きも観測されるなど、韓国ウォン相場もなかなかの状況だ。加えて、介入資金枯渇を懸念する声なども高まっており、予断を許さないかもしれない。(了)

当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

